

懇談会「国土計画考」 - その20 -

出席：今野修平氏・国土計画研究会メンバー

日時：平成19年11月1日（木）

場所：霞山会館会議室「桃源」

今野 今日、B4の紙1枚でメモをつくってきました。いままで話したことや何かと重なっているところはありませんけれども、こういうことも話が抜けていたなと思うものも補完いたしましたので、今日のメモを中心にこここのところを話して、できるだけ早く3の「国土空間論」に移りたいと思います。

今日のメモに従いますと、国土計画を立てる場合の国土の背景には「国家」があります。その「国家とは何か」ということの議論がまだ未熟であったなと思いましたので、議論すべき素材の提供という形で出しておきます。

まず、「統治システムの進化と民族国家の誕生」ということを打ち出しておりますけれども、その中で、日本国家の本質をしっかりと考えていかななくては行けない。少なくとも我々が国民としての教育論の中で受けてきた歴史は、90%、統治論からの歴史であった。なぜ統治論からの歴史であったのか。最近ようやく、統治される側からの歴史観が必要だということが言われてきていますが、その場合でも、統治者側と被統治者側という対立概念で歴史を見たがる。このところを少し考えてみたいと思ったのが、冒頭のところであります。

その背景には - - 私の見解、考え方が当たっているかどうかは別として、遠慮なく言わせていただきますと、一つは、日本の場合、米作という自給自足型零細農業が成立した社会であるという点では、世界の中では稀有だったのではないかと。それが人々の生活としては、定住志向が非常に強い形になります。コメが採れるということは連作障害がありませんし、投下労働力が大きいわけですが、それとコメの生産とが、ある種のバランスがとれて自給自足型の経済が成り立ってくる。その結果、土地から離れないということで、「土地支配」ということが、支配者側の論理からすると重要になってくる歴史の歩みだったと思います。

これに対して牧畜が主体の経済のところは非自給型です。ヒツジを飼っている地域は、ヒツジの肉はいっぱい食べますけれども、それ以外のものはどうしても手に入らない。従いまして古くから市（いち）が成立して、そこで交流の経済が成り立つようになってくる。交流しているのは人間で、天下を支配するのは、点である市の支配になってきますから、人民支配というか、対象を支配するということがないとおさまらないというのが、この間まで続いていた、堺屋太一の『チンギス・ハン』の小説を読んでもあきらかです。

土地に縛られて土地から動かないでいることができる、安定した生活を一生送れる自給自足型の米作地域と、交流しないと生活ができない、豊かな生活を展開することはできないというところでは、当然、統治のパターンが違ってくるのではないかと思います。「一所懸命」という言葉はまさしくそこから出てくるわけで、ひと所に命を懸けるといふ土地との絡みが日本の場合にはある。これはモンスーン気候帯に続いて、インド平野から中国の南部、フィリピン、台湾、日本列島、こういうことになるわけですが、これがいま、グローバル経済化が進むことによって、自給自足型零細農業によって、生活は貧しいけれども安定していたパターンが、貧しさに我慢できない形になって成長路線に乗っていった。それによって不安定化してきて、不安定な「個」を形成することにつながっていると私は見えています。

それに対して牧畜のほうは交流しますので、市が成立する。市に蓄積されている財を略奪すればあとは何にも要らないものですから、軍隊は駐留しないという形でチンギス・ハンはヨーロッパまで出て行く。次から次へと、とっては捨て、とっては捨て、反乱が起きるとまた行ってとる。こういう形であったので、文明史的には、この2つの巢窟が今日まで続いているということになるのではないかと思います。

市だけに考え合わせますと、それ以外のところでは生活できませんから、「自治化」ということが浸透してくる形で、ここに都市自治、地域自治、地方自治の根幹が芽生えてくるという形になります。その中で支配していくという体制は、非常に強力な軍隊と力を必要としますので、ローマ以来、専制国家

が誕生しやすい土壌が一方にあるということです。この見方は、逆に定住志向の米作地帯では、農民にとりましては支配者はあまり関係ないのです。自分たちの生活そのものに直接かかわる話ではないものですから、基本的な思想の中には、兵農分離型の思想が上でも下でもあったと思います。

かつてもちょっと事例で話しました。関ヶ原の天下分け目の大決戦を見学していた人間が、2万人いたという記録が残っていますが、酒ぶら下げて、重箱持って、ご馳走食べながら泊まり込みで見学していたというのは、私の人生には非常に衝撃的でした。

というのは、私も1回、子供のとき、陸軍の紅軍と白軍に分かれた演習を弁当を持って見学に行ったという経験があります。関ヶ原のあれを見ていても、結局、それぞれの山に陣取って、田んぼを耕している農民にはほとんど害がないわけです。むしろ住民は、落ち武者狩りをすることによって利益を上げられるものですから、それを待っているという経緯まであって、その辺が全然違う。

そうした中でもう一つの流れとして、中国における人類・文化誕生の中で「統治」というものがどういう基礎になっているか。中華思想は前に議論しましたから今日は抜きますが、昔から、天下を階層別に分類しているわけです。

まず、「天」がある。天は神の支配する世界。その下に「天下」の世界があって、天子が統治権を神から与えられた。天下の下に「国」があって、統治者は天子が任命して「王」になる。国の下に「県」があって、県の統治者は「公」になる。公ですね。王がこれを任命する。県の下に「郷鎮」がある。郷鎮の支配者、つまり、天子の一番末端の支配権を委任されているのは「長(おさ)」。こういう階層型の思想が中国における国家像です - - 中国における、と言うと語弊がありますが、日本もまさしくそうなのです。

中国と日本の思想的対立というのは、聖徳太子を事例にすれば、中国側は最初から、日本は「国」で王であると思っているわけですが、そこに「日出る処の天子」「日没する処の天子」という文書がぶつけられる。中国側は非常に怒るわけですが、本来、日本は中国側から見ると王である。したがって、足利幕府が中国との交流を始めたいと言ったときに、ちゃんと辞令を「日本国王・足

利義満」というふうに出しています。

中国のこの思想は、ヨーロッパにも共通項がある。したがって、伊達政宗が支倉常長を派遣したときには「奥州王・政宗」と書いています。ヨーロッパの社会も、日本的な意識よりは中国的な意識と共通項がかなりある。ローマ帝国の哲学でいくと、天子に代わるものは教会のボス、大教皇です。

実は、日本の場合、中国と対等に付き合う意識もあったことは事実けれども、影響を受けていたことも事実でございます。上下の関係では、国というものはこうした中で階層化していて、しかも、平面的には中華思想で中国が中心で、南蛮、東夷というふうに周りに野蛮な国々がある。日本はその中の一つである。こういうことで、中国共産党の近隣諸国との対外外交というのは依然としてこれを頑固に守っています。

したがって田中角栄が日中国交復興したのは、王が天子のところにちゃんとご機嫌伺いに来た。来たから、それじゃあご褒美に国交復興しようと。アメリカに対しても中国はその政策を頑固として守っていますから、中国の共産党トップの胡錦濤が先にアメリカへ行くというようなことはしないわけです。

日朝関係の拉致問題もまさしくその順序でありまして、金正日は、日本から総理が来れば、お土産に、じゃあ何人かの拉致被害者を帰しましょうという姿勢になるわけです。

しかし、この中華思想は、日本で言う、単なる上下関係での人間関係、社会関係と違うのは、そういうふうにご貢物を持ってきた奴には貢ぎ物の何倍ものお土産を持たせるわけです。琉球の歴史を沖縄で出版した本を読みますと、琉球という経済圏が江戸時代まで成り立っていた財政収入の主体は、中国に貢ぎ物を持って行って、もらってくる膨大なお土産であったとさえ言われています。こういう平面的な意味での中華思想、縦割りの意味での中華思想、こういうことです。

キリスト教の文明と中国の文明が、日本よりは近いと私が言ったのは、キリスト教で言う、「天にまします我らの神は、その子イエス・キリストを、エルサレムで生まれて人間社会に下してきた」というところは、天と天子の関係と

そっくりなわけですよ。

A氏 天子というのは、例えば中国全体を統一した人、例えば唐とか秦の……。

今野 そうです。秦の始皇帝から定着しました。

A氏 例えば三国時代はそれぞれ三国の王ですね。

今野 そうです。

A氏 中国全土を統一した人が自動的に天子になるのか、天子たる要件があるのではないですか。

今野 それは両方ではないですか。実質的に統一して、周りが認めないで一番苦労したのは、唐をつくった隆基が、統一した後、認めさせるまですごく苦労していますね。

A氏 おまえは天子だということを、誰かが承認するのですか。

今野 いわば、歴史がというか、住民がということですね。それに対して反日思想の根拠は、日本は東夷の属国である王であるにもかかわらず天皇と名乗った、というところなのです。天皇というのは天の子という意味、皇（すめらぎ）ですから。近代国家日本に対する反日思想というのはそこに根ざしているわけなので、単に蒋介石を応援したとか、そんな話じゃないんですね。

A氏 天子に宗教色はないのですか。

今野 宗教色と言うのかどうか非常に難しいのは、儒教につながる孔子の思想、あれを宗教と言うのか言わないのかというのと絡みますが、論語でも基本的にはこの概念ですね。

A氏 例えば 大公とか、 公とか言いますね。あれは県を治める人。

今野 そうです。加藤清正公とか、毛利公とか、伊達公とか、公をつけるでしょう。この公が明治以降、日本では、現実的な便益、権益としては貴族院の爵位を取った貴族という形になります。貴族の固まりが今日生きているのが、この霞山会です。あの子孫しか会員になれない。

E氏 結果的に日本はこの思想を取り入れているのですか。要するに、日本にはそういう明確な統治哲学はないかもしれない。中国には明確なものがあって、かつ、欧州も同じような思想で動いている。翻ってわが国は、中国的なタテ社会、タテのこういう関係を、統治の原理としているというふうに理解していいのですか。

今野 日本が意図的に取り入れたか、自然体として取り入れたかは知らないけれども、取り入れているでしょうね。というのは、織田信長以外、朝廷をつぶそうとした奴はいなかったでしょう。それは、朝廷を天子だと思っているからですよ。源頼朝にしても、徳川家康にしても、幕府といって京都から離れたところで支配権を獲得しようとしたのは、王的な意識ですね。武士社会を支配するという考えですね。

E氏 平面的なほうの思想で言えば、どこかに中心があるのですか。征夷大將軍という位はまさに東夷を征伐するための職位かもしれないですけども、日本人にとっての中華というのは中国なんですか。さっきの平面的なほうの考え方ですが。

今野 足利義満はそれで割り切っていたんでしょうね。

A氏 日本はものすごく「血」を大事にしますね。万世一系の血。中国もやはりそうですか。

今野 血族社会としてのね。

A氏 イギリスも大事にするみたいですね。

今野 中国もそうじゃないですか。いまの中国共産党なんていうのは、法治社会ではなくて人治社会でしょう。人間関係。ただ、それが日本と違うのは、日本が血縁社会だとすると向こうは地縁社会型です。だから「地域閥」が跋扈するわけです。中国人民解放軍というのは地域閥軍隊の連合体ですから。天安門事件のときも、河北の師団は出動しなかったけど、湖南省の軍隊が出て行って鎮圧した。中国共産党の総司令官が命令しても、しなくても、動きが違ってしまふのです。

A氏 中国の場合、天子というのがいて、天子を倒すときには大義名分が要るのではないですか。天子でない人が天子を倒すわけですから。

今野 そうです。錦の御旗というのはまさしくそれですね。中国も、新しい天子になった人は必ず錦の御旗を打ち立てて来るわけです。その場合にそれが口実になるのは、それまでの天子をベースとする社会の乱れですね。その乱れを直すということですね。

A氏 ヨーロッパでいくと、神の啓示があっいまの長を倒すみたいなどころがありますが、そういう論理が要るのでしょうか。

今野 中国史を読んでもよくわからないのは、モンゴリアンとか、満州族とかの異民族、そういうのでものみ込んだりうんですね。民族差別観というのは日本より少ないのかなあと思うんです。

中国に30回くらい行って、一つ衝撃的だったのは、日本で日本の歴史だけで育ってくると、遣唐使、遣隋使というのは、中国と日本の間が猛烈に交流されたがごとく我々は習ってきたわけですが、中国の長安郊外の武帝の墓に行きますと、武帝が死んだときの葬式に参列した人の石像が約2キロにわたる参道の両脇に残っていて、その中に外国大使が124人、名前を連ねています。その中に日本は入っていないわけです。

だから向こうは、日本の遣唐使、阿倍仲麻呂が来たなんていっても、そんなのは来たのか来ないのかわからないような意識ですよ。遣唐使、遣隋使が行ったということの歴史教育の過ちは、中国に相当土産物を持っていったはずなんです。その代わり帰りに何倍ものお土産物をもらって、お経までもらってくるわけですが、それは書かないですね。対等の立場で、あるいは留学生の立場なんですね。

E氏 あれは一種の朝貢なんですか(笑)。

今野 朝貢ですよ。その朝貢のルールが、経済活動そのものを左右するくらい大きな経済効果があったのです。その経済効果に目をつけて、江戸時代に15回、朝鮮が通信使を派遣してきた。日本は当時、銀の産地で銭があったものですから、それが欲しくて通信使をよこしたという説があるんです。お土産を持ってきたから、持たせたと。

だから、正倉院に蓄えられているギリシャとかペルシャのものなんて、みんな向こうがお土産の返礼として持たせてくれた土産物ですね。

B氏 天があって天子がいる、こういう概念というのは、始皇帝がオリジナルにつくったものですか。

今野 いえ、違います。これは、私は学生時代に日本文化史というところでもない授業を聞いたことがありますけれども、一神教か多神教かの違いです。日本でなぜ一神教が生まれなくて多神教になったかという、宗教学なり文化史の最大の課題は、最近になって私もようやく「こうなのかな」と考えるようになったけれども、日本は自給自足型の米作ですね。そうすると、水も神様であり、山も神様であるということで、多神教が生まれやすい土壌があるわけです。

それに対してヒツジしかとれない地域、小麦しかとれない地域は、そういうことはあり得ないわけです。それで一神教が生まれてきている。一神教の分派としてユダヤ教からキリスト教が生まれ、キリスト教からさらにイスラムが生まれてくる。

そういう一神教か多神教かで見ると、中国の場合には一神教と多神教の漸移地帯（中間地帯）なのではないかと考えられます。最も多神教的なのは、インドとか、日本の「山の神」的なものです。

B氏 宗教にはならなかったんですね。

今野 それが宗教かどうかはまた話は別で、思想的な意味では毘沙門天も不動尊もインドの宗教の流れで、多神教ではあれは神様ですからね。

B氏 そうすると、日本と中国の違いというのは、中国は、天子が前の天子を倒してそこにおさまっていくという歴史で、これはたぶん、民族が違うとか、そういうことがいろいろあるのですが、日本の場合には、朝廷を利用してもらうとか、天子になり代わろうということをした人はいなくて、天子を操ると。そういう違いがあるのですか。

今野 まあ、そういうこともあるでしょうね。ただ、「織田信長はなり代わろうとした」ということを言う解釈者は多いです。つまり、一神教か多神教かというのは、大陸か海洋という意味も背後にあるのではないかと見てい

ます。大陸文明というのは、一神教であるとする、中国はそういうふうに接していますから、思想的にその影響を受ける。その受けた思想を、統治システムに現実に取り入れたのが秦の始皇帝以降、こういうふうには勝手に思っています。

中国史という本は本屋へ行くと山ほどあるけれども、そういうことに触れている本は非常に少ないですね。だから、勉強の素材に困っていますけど。

D氏 偶然ですが、宮城谷昌光という中国の小説を書いている人がいて、たまたま『王家の風日』という小説を読んでいたんですね。紀元前11世紀に「商(しょう)」という国があって(後に殷になるけれども)、帝(王のもう一つ上)というのがこのときに始まったと書いてあるようです。殷のもう一つ前の商という時代で、紀元前11世紀の頃らしいです。

今野 それはそのとおりです。僕もそう思っています。

D氏 商売の商がこの国から始まった、というふうにも書いてありますね。

今野 そのあとの殷というのが、中国文明を体系化した一つのエポックの国家ですね。

これをヨーロッパに置きかえると、天子ないしは皇帝になろうとしたのがナポレオンなわけです。フランク国王からナポレオン皇帝になるわけです。それに対してドイツや何かは反発して、最後、ナポレオンはエルバ島に流されるという話になってくるわけです。いわゆる大陸型の発想というのはそれで、ナポレオンの場合には、ルーブル美術館を見ても、「ナポレオンか、それともキリストか」という思想的な対立があって、ベートーヴェンの評判が悪いのは、ナポレオンを賛美して交響曲「皇帝」をつくるでしょう。あれが今日の文明史論ではベートーヴェンの瑕なんですね。キリストを崇め奉らないでナポレオンを崇め奉ったと。

A氏 フランス人が言っていました（フランスも他の国もそうだと彼は言っていますが）、その国で国王的なものがやっぱり欲しい。で、国王を廃止したときに大統領を置く。これはフランスの場合は基本的には象徴なんです。確かに世界を見ると、国王がいない国は大体大統領がいて、大統領がいて王政があるという国はほとんどないんです。何かシンボルが欲しい。フランス人も、王政がなくなったときに寂しいと思って、そこで大統領というのを置いて、何かシャッポが要るんだというようなことを言っていますね。

今野 日本の場合、戦後の憲法でシャッポをシンボルにしてしまって、それがいまの天皇なわけで、その辺の思想というのはヨーロッパや中国にはわかりきれないでしょうね。

それから、さっき言った経済的な背景と結びつけて考えると、絶対権力を持っている、専制国家が生まれるということは、日本に生まれ育った我々には、何を読んでも究極的なところはわからないところがあるんです。結局、あれだけの交流の世界の中で、ある広大な区域を治めていくためには、大統領型の独裁権を認めないと治まらないのでしょうね。

中国を見てもそう感じます。中国共産党の支配体制とチベットのダライ・ラマとがなかなか握手できないというのは、ダライ・ラマは、狭いとはいえ絶対権を持つ宗教をバックにした人だから、認めるわけにいかないのでしょうね。

大統領制と議院内閣制と、大きな2つの流れが近代国家の中で体制として出てきたとすると、その背後には、思想的な相当深い深い対立意識があると思います。議院内閣制ができたのはイギリスで、海ですから、大陸型の思想に染まりづらいということで、日本はそれを、明治以降、形の上ではとったということがあると思うんです。

それを逆に中国みたいなところから見ると、十分に理解しきれないでしょうね。だから、天皇の戦争犯罪論とか、もう一方では、共産党の中でいま一番熱心に日本外交を展開している人は、天皇の訪中をすごく推しているそうです

けれども、天皇を呼んでこない限りは、日本と本当の意味で手を握ったことにならないと思っているからでしょう、彼らの哲学からすると。

A氏 明治時代に日本は貴族と平民と分けましたね。イギリスもやはり貴族と平民と厳然たるものがある。貴族と平民と言うとき、明治時代の平民というのは、人間として認めたという意味なんですかね。

今野 私は東北にいたので、あまりよくわからないのですが、関西に行くと、平民の下との対立意識がいまだに現実に残っていますね、賤民とか部落民とか。日本の社会が平民として認めていないわけです。

A氏 平民というのは、人間として一段下みたいを書いてありますけれども、人間として認めたという意味なんですかね。

今野 それもあるでしょうね。

A氏 「平民何の某」と書いてありますね。

今野 明治維新というのは、戊辰の役やら幕末の混乱期を通して、ちょっとアメリカが手を引いた時期に成立したわけです。なぜ手を引いたかということ、南北戦争なのです。南北戦争が起きたために日本にかまっていられなくなって、手を引いた。南北戦争の結果、奴隷解放ということがあったから、思想的には、明治維新政府が成立するのに奴隷を設定することはできなかったんでしょうね。それで平民として一律助かったのかもしれない。

したがって、日本における歴史のひずみとしては、諸外国の歴史と横並びで読んでみますと、「支配者階層の争覇物語」であるというふうに置きかえるのが正しいのではないかと。

E氏 でも、よく革命の定義のときに言いますね。中国の革命というのは別に民衆と関係なくて。ヘッドが代わるだけだけど、ヨーロッパの革命は、まさに市民革命そのものを指して言うというような違いを、歴史のときにはよく言いますよね。

今野 そこは歴史学者は、ヨーロッパの革命、フランス革命や何かは市民革命という言葉を使っていますね。いま、専修大学が創立130周年の記念公開講座を大々的にやっていますけれども、主題がフランス革命なんです。僕も半分くらい出て聞いていますけれども、自治権が成立した市民社会の成立がバックにあるかないかというのが、うんと違う感じがしますね。

A氏 下河辺さんがよくおっしゃっていますけれども、江戸時代は武家がうまい形で支配をした。そこで江戸時代は日本人の原点的なものが発揮された。特におっしゃっているのは、関ヶ原のときまでは鉄砲でドンパチやっていたのが、鉄砲を捨てて刀に置きかえて支配したと。鉄砲で支配するのと刀で支配するのでは違うというようなことをおっしゃっています。確かに、江戸時代になると鉄砲というのはほとんどなくなっているんですね。やはり刀で、武士道という形で喧嘩している。そこは一つの秩序というか、ルールができた、という感じがしますね。

今野 江戸時代の文化というのは、鉄砲で争って争覇したというのが関ヶ原で終わって、平和になりましたから、統治方式がガラッと変わるわけです。それは江戸の二代将軍、三代将軍で確立してくるから、そういう見方はあるかもしれない。ただ、江戸時代の文化の中で、鉄砲で争うのは公の意味の戦で、刀は私闘として許されるわけです。だから、藤沢周平の小説はみんな刀ですよ。

A氏 戦はなくなって、一応平和社会になって、争うのは、鎌倉時代に戻

って刀で、しかも一定のルールで争いなさいと、そういう統治機構になるわけですね。

E氏 江戸時代自体、要するに時間を止めることで300年の平安を保ったのではないですか。わざわざ街道も不便にして、大井川は担いで渡ったりするし、中山道なんかも随分不便に、わざわざ谷を通りながら道にしたわけですね。

A氏 いまのスローライフの原点みたいなものですね（笑）。

E氏 だから、ものが進歩しなくなっていますよね。堺屋太一が似たようなことを言っていて、欧米では、例えば拘束道具とかもどんどん進歩して、手錠とかそういうのができるけど、日本の場合はそういうのはできないから、縄の縛り方とかそういうのが発達して、機能的には進歩しなかったというような話をしていますね。

A氏 確かに堺屋太一が言っているのは、武家というのは全く進歩を止めたんですね。その中で改革の意識を持っていたのが商人で、実際に江戸時代では、いろいろな形で改革して世の中を引っ張っていたのは商人で、そこに富がどんどんたまっていったというようなことを言っていますね。

今野 政治の世界を統治の主たる方法として人類を持っていたわけだけど、江戸時代、政治は止めるけど、それでもなお経済は発展した。こういうふうに解釈するほうが正しいのではないかと思います。そうすると、経済がどのように発展してきたかというのを見るためには、政治の世界を中心とする統治の歴史だけではわからないわけです。それが僕が経済史的なことに傾斜していった一つの理由ですが、江戸時代260年間での統治される側の経済活動というのはものすごい進歩ですね。幕末には、年間のお伊勢参りの人口が全人口の1割近くになるでしょう。そういう意味では経済生活がどんどん進展していったと思

います。

B氏 長崎とか平戸とか、ああいうところしか窓が開いていなかったわけですが、それでも世界に伍して経済的に発達したんですかね。

今野 それは単純な物理的な解釈をしますと、銀に潤わされるわけです。世界一の銀の産地でしたから、ものすごく儲かるわけです。それが政治的な進歩をストップさせたことをカバーしていたと思います。明治維新が起こらざるを得なかったことの経済史的な解釈をすると、銀が枯渇してくるわけです。したがって、開国した後の輸出品のメインは、銀が首位の座から落ちて絹に代わるわけです。

A氏 ドイツなんかは、国王もビジネスをやっているケースがあるんですね。例えば工場をつくったりすることに参画したりしているケースがある。日本の場合、武家というのは、上杉家みたいに困ったところを除いては、生産する、付加価値をつくるということは発想なくて、税で巻き上げるという形しか発想していないわけですね。

今野 そういう見方が一般論としては多いですけども、しかし、大名の統治方策を見ると、決して経済を無視していません。

例えば、仙台は「杜の都」と呼ばれたわけですが、別に植林していたわけではないんです。戦争がなくなってしまって、武士というのはいわば潜在失業者ですから、家計を立てるためには無駄なことをしないというので、おまえたちに屋敷を分けてやるから、その屋敷に梅と柿を必ず植える。生活のたしになるぞというわけで、町じゅう緑だったというのです。戦後、仙台杜の都というと、青葉通り、定禅寺通りとか言うけど、パターンが全然違っていたわけです。それは備蓄食品の生産ですし、それから、各藩ともに内職を進めて、領地拡大が出来ない平和経済の下での経済発展を目指しているわけです。

A氏 それはかなり苦しくなっていますね。

今野 そうです。だから、それなりの経済政策は持っていたと思います。場合によっては、経済政策上、いまの府県知事や市町村長より権限を持っていたのではないかと思います。

A氏 武家の産業というと、金や銀を掘り出すことがメインだったわけですね。

今野 それは一番押さえていましたからね。それもけた違いにカネになるわけです。

E氏 1600年代は新田開発は進んでいますね。

今野 新田開発一途で進んでいた時代があって、それを変えた将軍が八代将軍吉宗でしょう。もっと多面的にしていったんだよね。新田開発というのは、コメの経済で、水田を増やそうというので一次方程式型の経済政策論なんだけど。

A氏 確かに日本というのは市民革命を経ていないわけですね。なぜ市民革命が日本では遂に起こり得なかったんでしょうかね。

今野 市民にとって必要ないからでしょう。支配者が誰になろうと、コメがとれればいいわけです。私の田舎で言えば、来年、やませ（山背）が来ないのが豊かになる大もとですから、それ以外のことは、まあ、影響度がないとは言えないけど、二次的な影響、三次的な影響にしかすぎないということです。

C氏 基本的には土地所領の仕組みが全然違う。それを抜きにして考えら

れないわけでしょう。

今野 そうです。ここで、梅棹哲学とか、米山俊直とか……。

C氏 統治している側の人数というのはほんの微々たるものですよ。

今野 微々たるものと言っても、全体からすると1割近くありましたからね。

C氏 それ以外は小作でしょう。小作も、非常に零細な小作で、それが明治維新以降の日本の大陸政策や何かにも出てくるわけですね。

今野 ただ、小作が明確化して社会問題化してきたのは江戸中期以降です。つまり、商業資本が発達してきてから。

A氏 そもそも、市民という階層が成立し得なかったから市民革命は起こらない、ということですか。

B氏 市民は、自分たちの安全であったり、自分たちの収穫する権利であったり、そういうのを、例えば漁師とかその辺と契約して「守ってもらう」ということが最初にあるような気がしますね。そういうニーズがあるので、契約も起きるし、契約をきちっと履行してくれなければ反乱を起こして革命もするということになる。

C氏 ニーズがあった時代はそうなんです。

B氏 日本は島国であり、極東であり、外敵から襲われる可能性は極めて低いし、先ほど今野先生が言われたように、関ヶ原の戦でも弁当を持って見学

に行くという社会ですから、そういうニーズは基本的にずっと起きてこなかったということかなと思っていますけど。

C氏 その段階で国という意識があったかどうかですね。

B氏 空気みたいなものだったんじゃないですか。

今野 司馬遼太郎は「くにあって国家なし」と言っているわけです。日本人の平民の理解でいくと、ここで言っている国というのは、「国」を当てるのではなく、司馬遼太郎は、平仮名の「くに」と言えと言っているんです。

A氏 ヨーロッパの場合、一つの契約の中で支配と被支配がある。日本の場合、鎌倉時代にさっきおっしゃった一所懸命という契約があったけれども、江戸時代あたりから、契約という概念がほとんど消えてしまいましたね。

今野 ヨーロッパでは諸侯の財源が、通行税であったり関税であったりしたわけです。その証拠はライン川を上から下まで船で通ればよくわかりますが、したがって契約になってくるわけです。通行者からすれば、その代償として安全を手に入れた。その点がだいぶ性質が違うわけですが、背景には、交流経済と自給自足型の農業経済というのは否定できないのではないかと。

コメというのは、私も農民の出だから作ったけれど、投下労働力と生産量を方程式に置きかえると、その利ざやはずっと低いんです。ぎりぎりなんです。どんな大農家でも、抱えている人間に飯を食わせることを家計上の支出として考えて、収入と支出を考えると、利ざやはずっと低いから、1割～2割しか社会に回っていないわけです。カネにかえられないわけです。そこが自給経済と交流経済の基本的な違いだと思います。

A氏 契約というのがあると、税というのは契約の対価として払う面があ

って、日本の税とヨーロッパの税は基本的にそこが違うんですね。

今野 そうです。社会と市民は契約すべきであるというのが、ジャン・ジャック・ルソーの「社会契約論」になってくるわけです。どうしても日本的な文化の中だけで育つと、ジャン・ジャック・ルソーの社会契約論というのは読んでもわからないですね。

B氏 やはり税というのが大きいのでしょうか。王様、その地域の代表者に徴税する権利を与えたり、税を通じてそういう契約というのが……。

A氏 税は契約の延長線上で、守ってもらうための対価として払うという考え方が強いから、召し上げられるということではないわけですね。

B氏 それから、先ほどのニーズという話で、安全だし、特に契約をするニーズがなかったような気がしますけれども、もう一つは、島国だから隣の芝生を見たことがないというか、中国とかヨーロッパという世界があって、どういう生活をしているとか、どういう自由があるということを全く知見できないわけですから、欲求が起きないわけですよ。

そういう情報は、極めて一部の徳川幕府とか薩摩だけにある。隣の芝生はおいしいとわかっている薩摩とかその辺は貿易をして、300年、国内全体にそういう不満が全くたまらずに行けた、そういうことじゃないですかね。

今野 でも、戦国時代、江戸時代の社会でも、支配者階層と被支配者階層の間に全く接点はなかったかということ、そうではないんです。

例えば戦国時代の大名の戦の中で、農民側からすると一番痛手なのは、秋口に、侵略軍から水田に火をつけられることがあるんです。そうすると全く収入がなくなるから、それを防ぐために支配者階層は領土を防衛してほしいという点があって、その代償として、収入があったあかつきには、農閑期には兵隊で

いくらでも出ていきますという形ですから、日本の戦国時代までは秋の収穫時はほとんど戦争はないんです。

E氏 戦国時代は、戦いをするときでも、農作物には影響がないようにやっていたのではないかという気がしますが。

今野 それもあります。

E氏 自分が領主になったら、そこで生産を上げなければいけないわけですね。そうすると、そういうことは決してしないのではないかと。

A氏 一定のルールがあったということですね。

今野 全くそれで一徹していたかというのと、そんなことはなくて、そこを破ったのは豊臣秀吉なんです。水田に火を放つわ、ダムをつくって水攻めをするわ。

A氏 信長、秀吉はそういうのは無視したわけですね。

今野 ええ。その反対に武田信玄が人望が厚いというのは、農民側に立った戦の仕方をしたわけです。武田軍がいつ甲州から飛び出て行って悪いことをしたかというのと、みんな農閑期なんです。

D氏 ずっと飛んで、戊辰戦争のときはどうだったんでしょうね。

今野 あれは、いわば朝廷軍が敵をつくらないと統一できないということの戦だったんでしょうね。多様化している社会を統一するためには、戦をつくって危機感を煽らないと社会は一つにならないですね。中国や韓国の反日論な

んで、いまだにそれを使うわけです。その犠牲になったのが、徳川幕府にバカ忠実な奥羽列藩同盟だったと思いますね。

A氏 さっき今野先生がおっしゃったように、歴史というのは支配階層がつくるわけで、明治維新の政府がつくっているわけですが、いま客観的に見ると、徳川幕府のほうはルールに基づいてやろうとしていた面があって、官軍のほうはそこを破って、ずるいというか、かなりルールに触れたことをやっているんですね。お互いに話し合おうとしても話はしないとか、あえてそこでもめ事をつくっている。

今野 それをしないと統一できなかったわけです。もとに戻しますと、そういう中で、いま、国土計画における国家というものが新たに問われ出していると思います。ネオナショナリズムというのは、グローバリゼーションと裏腹になって認識されるようになってきています。

一方、200年前にでき上がった近代社会でのナショナリズムが、EUの誕生で根底から引っ繰り返されるという概念が出てきている。しかも、それは地球上では、まだ近代的なナショナリズムの波さえ来ていない、部族社会が広く分布する中で起きていますから、局地的な軋轢があちこちに出ている。イラクだとか、エチオピアだとか、スーダンだとか、その最たるものだと思います。今後、新しいナショナリズム、ネオナショナリズムがどのような形で進んでいくのかというのは、いま、文明論者や何かが議論を始めています。

この辺を専門に、とは言わないけれども、ある程度議論したり、見通したりしないと、国土政策がどうあるのが適正なのかという議論に辿り着いていかないわけです。「国家とは何か」とか、「地域とは何か」というところに答えが行かなくなると思います。

明治以来100年間、この問題は、実は日本の場合には、こんなことを言う表現が悪いかもしれないけれども、中央省庁に権力を集めて、中央集権型の官僚統治型システムで置きかえてきたと思います。逆に言えば、日本の官庁密室

で統治を委任されて進めていくことが認知されていた土壌は、そこにあるのではないかと思います。

A氏 さっきの契約の話ですが、望ましい形は、国土政策と地方自治体との関係で、地方自治体が国家に「全体の国土政策をつくってくれ」と委任して、そこで国家が、最も望ましい国土政策をつくと。そういう契約を結んでつくるのが一番望ましい形ではないかと思えますけれども、日本はそういう形ではないわけですね。

今野 そのこのところ、僕はそう解釈していないというのは、ヨーロッパにおける地方政府と中央政府がどのような経緯で誕生してきて、どういう役割分担をしているかということ、端的に言いまして、軍事防衛、国民経済、国際外交、その他（「全国民に必要な普遍的な基本政策」と置きかえていいと思えますが）、この4つが中央政府の権限です。

それ以外の、日本の省庁で言えば文部省とか、農林省とか、通産省の大部分とか（通産省の通商は中央政府です）、交通の大部分とか（これは中央政府の所管になると思います）、それから社会保障、医療、こういうのは本来は地方政府の責務と役割ではないかと思えます。

ただし、明治以降、未成熟社会の中で近代国家体制をとらざるを得なかったために - - 非常に同情的な言い方ですが、中央官庁集権型の体制でごまかしてきたわけです。ごまかしてきたが故に、地方自治体と中央省庁との間でどういう役割分担が不文律としてできたかということ、政策立案、企画、この分野は中央が握る。そして、その現場での実施は全部、地方自治体が担うという分担方式になっていたと思います。

その典型的な事例が機関委任事務ですけれども、いまの国会の論議を聞いていても、「産婦人科医が足りない」と。陣痛が始まって受け入れる病院がないというのを、なぜ霞が関が返事しなくてはならないのか。産婦人科医の配置なんていうのは、本来は生活圏の課題で市場が決定するのです。したがって

生活圈か国家社会かという分け方をしたときには、その責任は知事なり市長であるはずですが。ところが、そう割り切れていないから、厚労大臣が自分の給料を返上してまで国会で答弁をしている。

E氏 あれは、地方厚生局を持っている、みなしの道州政治の長として答えているのではないですか。産婦人科の話は、恐らく県を越えた広域の話になってしまいますよね。奈良県のときも県を越えて。

今野 代替しているところは中央集権型で、それでおさまっていたわけです。そのかわり例えば国勢調査でも、どういう調査をするかというのは、企画は全部中央がやって、実施は市町村がやる。その分担がおかしいのではないかということを私は主張しているわけです。ただ、現実社会からはちょっと距離があり過ぎるために反応がないのかもしれないですね。

C氏 恐らくいままでは全くそういうことでしょう。

今野 そうだと思います。

C氏 大学の教育から何から、そういう方向に向かってつくられてきたわけだし、統制そのものもそうだし、いまの医療の問題にしても、地方自治体はそこまでのこととして考えていないでしょう。

今野 一方、それに悪のりして、と言うと感情論みたいになってうまくないけれども、国が、国民経済なり、軍事外交なり、国際外交なり、基本政策に特化してすべてその点についての責任を果たしているかということ、全く果たしていない面もあると思います。

C氏 そうというような仕分けをするかという、そこがはっきりしていない

のではないですか。

今野 そうです。合意していないわけです。

C氏 だから、非常に末梢なことまで中央官庁がやらなくてはいけない形になり過ぎている。

B氏 実態があって役割分担をどうするかということだと思いますけれども、実態は、今回の建築基準法の建築確認騒動でもそうですが、医療の話にしても、十何年前くらいから、第一次医療圏とか、第二次医療圏とか、医療の広域地域の役割分担みたいな、都市計画的な話はやっているわけです。だけど、それはたぶん国が頭の中で考えて、つくりっ放しなんです。それが現場の実態に合っているのかもわからない。一方で、じゃあ都道府県や市町村はそれを受けて実際にきちっとやっているかといえば、これまた押しつけられて、これは自分が本来やる業務ではないということになる。別に計画通りにいなくても何の問題も感じない。

そういう形で動いている部分があって、医療の話にしても建築確認の話にしても、同じだと思うんですね。要は、上と下の受け渡しが全くできていないという実態があるので、いまは上も下も機能不全に陥っているというのが実態だと思います。その中で、いま、国は何をやるか、地方は何をやるかといっても、何か空理空論のような感じがします。

今野 地方分権委員会は本来そういう議論をきっちりすべきであって、そういう議論こそが地方分権委員会の議論の仕方なんです。と、僕は思いますね。

A氏 今野先生がここに、「道州制論議、地方分権論議のむなしさ」と書いておられます。この前、地域学会のシンポジウムで、久しぶりに面白いシンポジウムだったのですが、九州というのは言ってみれば道州制の一番先端で、し

かも知事会の会長がおられますので、最初に議論して、それからパネルディスカッションをやったのですが、2対2で反対派が2人いたんです。推進派というか、政府から1人、事務局の人が来て、地方の代表の人が福岡県から来て、真っ向から反対するのがお一人、武生の市長かな。もう一人は、関西学院大かどこかの大学の先生で、財政の先生なんです。終わってからパーティーで話しても、やはり賛成ではないんですよ。

武生の市長が言っていることが非常に明快で、要するに「道州制とは何か」と。まず、私たちは県が要らないと思っている。道州制論議というのは県の延命策であって、いまのままでいくと、例えば8年後でないと結論が出ない。じゃあ8年間、県はいまのままで続くのか。続いた挙げ句、またワケのわからない結論になってしまうのではないか。我々はそれよりも、とにかく県をなくしてほしいと、一点張りなんです。非常にアクティブな議論で、会場からもものすごく質問が出て面白かったですね。

今野 理論としては非常に明快ですよ。それはそれで聞く価値のある意見だと思います。ただ、どのように役割を分担して、どういうふうに責任を取るかというのがないと、単に縄張り争いの一種になってしまう。

B氏 いまの市町村でも足りないんですね。いまの都道府県でも足りないんですね。それぞれ足りないんです。じゃあ、両方が一体になるといいですか、市町村を基本としながら、例えば市町村の連邦的に県みたいな感じでやるとか、両方どちらとも不十分なので、いいところだけとって構築していかないと、「どっちか」という議論は、どっちになっても不幸だという気がしますね。

A氏 歴史からいくと、連邦というのは日本ではなかなか難しいと思いますが。

B氏 市町村連合みたいなものですね。

今野 「道州制のむなしさ」と書いたのは、そういうように、日本列島の地図に線引きで鉛筆を入れることばかりになっているのです。そこがおかしいと言っているわけです。そうすると、この勉強会で一番最初にやった、奈良朝、統一国家ができたときに国分けをどうやったかというのが、生きたままになっているんです。くっつけたか、くっつけないかだけの話。

A氏 その線引きに8年かかると言っているわけです。

今野 いや、線引きなんか要らないんですよ。やる必要はないんです。私に言わせれば、かつての、水田を唯一の経済活動の根底だと考えていたときのいわゆる縄張り、土地の上に線を引く、その思想から一步も出ていないから線引きになってくるんですよ。

A氏 全くそうです。ただ、道州制の委員会ではまずその辺をやろうとしていて、アメリカやイギリスでは、行政サービスを提供するというレベルで、例えばカウンティ - - アメリカは幾つものカウンティがありますね。行政サービスを提供するという形で幾つかの組織をつくって行って、自然と例えば県という組織がなくなってきて、例えばMunicipalみたいに、地方自治体というのが一つの基礎自治体になるような形をやったらどうですかと言ったら、あまり賛成されなくて、結局は、住民にサービスをする対価として税を払えばいいのではないかというお考えで、カウンティ論にはあまり賛成していただけなかったんですけどね。

今野 右側のページの4行目に、「国民経済、軍事外交、国際外交の中央への再編」ということを言っていて、その下に「生活の地方の構築」と書いています。この場合の「生活」とか、国民経済とこの分野は中央へと言っているのを、権力としてつかまえられると私の主張は大きく曲げられてしまうわけです。行政サービスという点で、サービス提供者として地方政府と中央政府が

あると思います。その結果として権力を補任しましょうという話になるのだから。

そうすると、産婦人科の配置まで中央がやるのが、いかに不自然かというのはわかるわけです。同時に、長崎市長が巨額のカネを使って、毎年、アメリカの大統領に原爆反対の陳情に行っている。欧米社会では、軍事外交にかかわる権限を地方自治体の一市長が持っているなんて誰も思っていないから、会ってもくれないわけです。拉致被害者の家族が行くときは大統領は会ってくれるけれども、そこがわからないでいる。沖縄の基地問題にしても、全く混同しているんですね。

A氏 いまおっしゃった話で、竹島問題は、地方自治体と韓国との話をしているでしょう。あれは危ないと思いますよ。国家がやるべきですね。

今野 そうですよ。韓国はそういうふうにとめていないですから、島根県が何を言っても痛くも痒くもないんです。国際ルールから言ったら、県は発言権がない領域ではないか、と思いますね。

A氏 県境の話じゃないんですね。国境の話ですからね。

今野 そうそう。だから韓国の姿勢を見ていますと、水路測量のときに海上保安庁が出て行ったら、折半して一緒にやろうという話はすぐついたでしょう。権限のあるところが出てくれば、向こうだって相談に乗るんですよ。それを、島根県が出て行って、これはもともと日本の戸籍で何市何町何番地なんて言っても、しょうがない話なんですね。

A氏 国がストップをかけるかする必要はないのでしょうか。逆に彼らはメンツをなくしてしまっているわけですよ。

今野 まあ、国もずるいですね。泥かぶるだけだと思っているから、出ていかない。無責任極まりない話です。それは沖ノ鳥島の問題だってそうですよ。

A氏 あれも東京都がやったりしていますね。

今野 それから、台湾の先も同じ。

だから、私はここで、中央と地方の役割分担、責任、この2つの面で明確にすべきだと思います。そういう目で見ると、国土総合開発法 - - 私は法執行者として長年従事して給料をもらったけれども、国土総合開発法は基本的に主要施設の規模と配置を決める政策である、ということはそのとおりだと思います。ただし、それを国がやるのか、地方がやるのかというのをあそこは明瞭にしていなかった。

したがって、我々の研究の元祖である吉田達男さんの理論に従えば、インフラの配置を考えるのに、インフラストラクチャーAとインフラストラクチャーCの主権と責任、これを明瞭にしていないところに政策の混乱の基礎があった。こういうふうに吉田先生の墓前に僕は報告したいわけです。AとCを一緒にしているわけですよ。それはちょっとおかしい。

C氏 それはどうやって解決していくのですか。

今野 国土政策と地域政策と分けて樹立したらいいと思います。そのときの責任は、地域政策は地方政府の長。

国が立てる国土政策は、国民経済、軍事外交、国際外交が基本政策だとすれば、最もわかりやすい話では、この十年間における津軽海峡の変化に対して、国は、どういうふうに国土政策の中であれを位置づけるんですかね。

E氏 例えば全総計画に代表される国土計画というのは、ファンは誰かというところ、地方自治体なんですね。結局、地方自治体が喜ぶこと、あるいは、喜ぶ

プロジェクトを取り込まないとファンが増えないという、そういう強迫観念がずっとあるのではないですか。

だから、「地域ごとのプロジェクト」を書いているのが2と4なんです。結局、5も書いたのですが、1と3は書いてはいない。そこでプロジェクトをどう書いてもらうかということだけが、どぶ板の政治家と地方自治体の一番の興味の対象で、根幹の部分の国土政策はどうあるべきかというところは誰も議論しないんです。もちろん、つくっているほうはそういう議論もしたいと思っ
ていても、それにはファンがつかないわけです。

じゃあ、1と3に罪がないかという、そうではなくて、三全総がそういう意味では国土計画の本質を見失っていると思うのは、定住圏整備みたいな話を国が言った上に、かつ自分がプレーヤーになって定住圏整備をやらなければと。まあ、少しは節度があったので、モデル定住圏 - - 本来は地方がやることだけ
ど、国がモデル的にやりますという話で、モデル事業がそこから始まるわけ
です。

モデル定住圏づくりから始まって、中央省庁は、ありとあらゆる地方の細かいプロジェクトにモデル事業と称して入っていくようになって、AとCの間が、
Bを飛び越してどんどんCの領域に入り込んでいった。そういう形で国が仕事を増やしていったところが、三全総以降、いわゆる「地方の時代」と言われた時代の墮落した契機かなという感じがしますね。

A氏 三全総でモデル定住圏というのを設定した経緯はどういうことだったんですか。本当を言うと、こういう全体の姿を出して、地方で定住という形を進めていけばいいわけですね。ただ、そこで新産・工特の雰囲気があって、何かこう、国がやって、そこには指定をしていただくということになった感じがしますね。

E氏 国がおカネを配って指定してというのをやらないと、国の関与がなくなることをおそれたと思うんですね。

今野 2つ答弁したいと思います。

1つは、生活圏を国土計画の中に入れ込んだのは二次総計画です。三全総ではないんです。多層的な生活圏をちゃんと打ち出して、そこに配置すべき主要施設まで全部列記しています。したがって、次の政策執行の点でいまになってみればミスだったというのは、新全総が閣議決定したあと、地域総合開発法をつくって、地域計画は、この生活圏に対する空間計画を地方自治体の長（当時は知事でしょうけど）が主体になってつくるべきであるという体制を整えられなかったというのが、三全総が責任を持つ前の最も重要な責任分担ではないか。それをしなかったというところだと思います。

2番目は、全く逃げ口上の答弁なんですけれども、三全総でモデル定住圏と言って遠慮したのは、「主権は地方」という意識があったわけです。したがって、モデルにまでしか国は立ち入らないとして逃げたところが無責任だったですかね。

E氏 でも、その後、モデル事業の大流行りなんですね。

今野 モデルを見て、地方が自主的にやってほしいということだったと思います。そこが、国と地方の権限の境を越さない、一線を越えない貞節さであるということを三全総が言ったのですが、結局、真の行政は一層で、定住という言葉自体まで誤解されていきましたからね。

B氏 東京にも定住圏を設定しましたからね。

E氏 なかったのは、神奈川と北海道と沖縄ですね。

今野 僕はいまだに、定住圏はあるべきだと思います。定住というのは、「そこに生まれた人をそこから動かさない」ということはひと言も言っていませんし、そんなことは誰も考えてもいなかった。そうではなくて、ここに定住

したいなあという環境の国土空間をつくるということだったわけです。

定住圏と命名したのは、僕も深くかかわっていて責任がありますが、松田さんという審議官が建設省から来ていまして、松田さんに、「定住環境圏と言わないと誤解を受けるぞ」と言われたんです。ただ、国の基本政策として政策の名前を国民に周知徹底させるためには、カナに置きかえて5文字か7文字だと主張したのは僕なんです。そうしたら下河辺さんが、おまえの言うのも論理だ、何々何とかかんとかという長い言葉では国の基本政策にならない、と。

そこで、国語学者の意見を聞いて決めようということで、定住の意味を諸橋轍次先生などの意見も聞きました。

言葉の定義としては別に生活圏の取上げについて、飯沼先生に聞きました。先輩方の意見を聞いて、誤解されないように計画文の中で書けばいいといって書いたのですが、誤解されましたね。

後になってわかったのですが、浅学非才だったなと思ったのは、「定住」というのが中国の『春秋』か何かの古典にあるんです。4000年間生きていた定義をわずか数人の議論で決めてしまったところが、ちょっとまずかったかもしれませんね。

A氏 モデル定住圏の指定というのは、複数の県にまたがっているところもあってかなり広いですね。あれは行政区域内でやったわけですか。

今野 基礎自治体の市町村単位です。

A氏 例えば2つの県にまたがっているところも。

今野 そうです。

A氏 申請してきたところは大体そのまま認められたのですか。

今野 いや、申請に対する許可とかいうことは、当時はあまり考えなかったです。モデルとしての採用ですよ。

E氏 要するに、計調局で計画をつくって、実施したのは地方振興局なんです。そうしたら、大都市圏整備局も何か必要だといって、東京にも定住圏と。予算の出所は違うのですが、定住圏としてのモデルというので。

今野 そこから脱線してしまっている。

E氏 国土庁の組織をそのまま移してしまったという感じになって、あまり思想的ではないんですね。

A氏 それで道路が通るとかいうメリットも、それほどなかったということですか。

E氏 むしろあのときは点モノが多いんじゃないですか。要するにスポット。箱モノというか、線モノじゃなくて。運動場とか美術館とか、ああいうのが増えたのはあれ以降だと思います。明らかにあれから公共投資は、三大都市圏よりも地方圏が増えているんです。50年代以降ですね。

今野 東京で定住圏が要るか要らないかという議論で、1つの事例でいま思い出しますのは、全国の都道府県の企画課長会議か企画部長会議だったと思いますが、僕が説明に行ったときは、「東京ではどうなんですか」ということの説明の事例として、例えば東京23区を取り上げた場合に、23区が一つだということの証明はしやすい経済現象は山ほどある。しかしもう一方で、目をガラッと変えまして、江戸川沿いの葛飾区・江戸川区が受ける洪水のパターン、それから、荒川区・北区・足立区が受ける荒川の洪水のパターン、世田谷区・大田区が受ける洪水のパターン、神田川・目黒川の流域が受ける洪水のパターン、

「全然違います」。

江戸川流域の場合には、利根川の栗橋という最も弱点的なところの堤防が破堤してから24時間後に行政区域としての東京に水が届きます。荒川は12時間後です。多摩川は上流に雨が降ってから4時間か6時間で届きます。神田川はもっと早い。そうすると、地方自治体が自分の地域の中の共通した施設整備の対象として、洪水防止、災害に対する対策ということを見ると、この4つに分けて、そして共通の利害を受けるところが連合して、これに対する対策を考えろという考え方が定住圏なんだとこう言ったことがあります。

しかも、東京23区が上水の給水をどう受けるかといったときに、金町浄水場から江戸川の水を飲んでいる地域はこの地域、世田谷や大田区は多摩川の砦から受けている。そうすると、かなりの程度の共通圏がある。したがって水を中心とする圏域整備は、いまの行政区域で固まるのではなくて、これらが一緒になって、そういう圏域を前提にして自らが施策を考えるべきではないか、という説明をしたのを鮮明に覚えています。

E氏 随分、流域圏と重なっているんですね。

今野 いまのは水の問題だから流域圏と重なるけれども、それ以外にも...
...

E氏 昔の藩というのは、大体そういう圏域なんじゃないですか。上流から下流までひとそりい揃っていて、自己完結するような地域割になっていたのではないですか。

今野 昔だけではなくて、いまの府県制を布く明治22年までの府県制の動きの中で、最後に東京都に組み入れられたのは伊豆諸島と三多摩なんです。三多摩を入れたときの建議書を見ますと、「このままで23区を中心とした東京府が干上がってしまい、将来、水に困る可能性がある。したがって水源地帯まで

一つの行政区域にすべきである」というので、いまの南多摩郡、北多摩郡、西多摩郡、この三多摩が東京都に入ったのです。旧江戸の市街地プラス、豊多摩郡と足立郡、葛飾郡が当初の案で東京府だったのですが、それにくっついたわけです。

そういう、都道府県の県境を決めるのに生きた事例があるんです。これはまさしく定住構想です。

A氏 そのときに東京都から神奈川県に、見返りではないけど、多摩をもらうときに、たしか相模原あたりを……。

今野 相模原市は相模川流域ですね。

A氏 何かそこでやり取りがあったはずですね。

今野 もう一つのやり取りは伊豆諸島です。最初の案では、あれが静岡県だった。だけど、あそこは受け持ったところはものすごくカネがかかるだろうから東京都が持てと。あれはマイナスの地域ですから。それと絡んでの駆け引きはありました。

だから、誤解を受けたとすると「事業化」と「線引き」なんです。そこに走ってしまって定住構想の誤解が拡大していった。その結果、私はいまでも、「担当計画官として頭を剃らないで出てきていいのか」と、個人的な友達にまで言われています。

E氏 基本的に国土計画で生活圈みたいな話をする必要があるのか、あるいは、国家レベルの計画で生活圈のような議論をする必要はないのではないのか、ということではないんですか。

今野 そうなんです。

B氏 最近の二地域居住とか、ワケのわからない話が出てきますけれども、定住圏なんかより輪をかけてワケがわからない(笑)。

E氏 恐らくそういう話のほうファンが多いからでしょう。国家計画だけの話をしていると、ついてくる人がいないのではないですか。かつ、それというのは統治の論理で、上からの計画なので、「そんなものが本当に要るのか」という議論に勝てないのが何か本能的にわかっているみたいで、だから最後は、必ず地域の話を入れてくるんですね。

B氏 四全総のときのような、1万4,000キロと多極分散型、この辺は本当にわかりやすいと思うんです。

今野 いま、東京がこれだけ大きくなったでしょう。国民経済のシェアをものすごく持っていますね。あえて言えば、二番手は中部圏があとを追いかけてきて、近畿圏が没落してきて三番手になっている。

そうすると、北朝鮮からのミサイル攻撃に対して最初に防御しなくてはならないのは、首都圏に対する抵抗力をどうつくるかということでしょう。二番目は中部圏、三番目は近畿圏。それに対して日本列島の中にミサイル発射基地をどう配置するか、これが国が立てる国土計画なんです。

E氏 本来的にはそうだと思いますけれども、そういう議論をいまの日本の国の中で真っ向から出した途端に、恐らくつぶされるのではないですか。そういう議論こそ国土計画だと思いますが、そういうものに対する拒否反応がやたら多いんじゃないですか。

C氏 防衛庁がしきりにそれをやっているじゃないですか。日比谷公園に置いたらどうなるとか。

今野 日比谷公園ではなくて、ルート上からいくと、一番カネかけて整備しなくてはならないのは舩倉島でしょうね。そこに巨大なナイキ基地をつくる。

E氏 中央計画は地方のこまごましたプロジェクトの話はしません、社会資本Aの話までです、ということでしょう。もちろん社会資本Aも、書いてあるかというのが難しいんですけどね。

今野 いま、私がミサイル基地なんて事例で説明したから誤解を受けたけれども、例えば、日本の太平洋ベルト地帯の成田と関西空港を念頭に置いてもいいです。これと世界を結んでいる飛行機がどこを飛んでいるかという、対アメリカ大陸には、東北の東岸から一番近い陸地としては釧路、根室なんです。ヨーロッパ直行便は、佐渡と村上市の間を通過して、秋田の沖を通過してシベリアを通過して行くのですが、そうすると秋田空港、あるいは北海道の日本海岸なんです。

そこでの安心・安全で事故をなくすのは、成田空港を出てから洋上に出ると、あとはアメリカ大陸まで、途中で下りられる空港がないのです。それを機材の進歩で補っているわけです。だけど本来であれば、成田の補完空港は釧路か根室につくるべきだと思います。そうすると、1,000キロ短くなります。悪天候、燃料不足に対してそれで非常に安心感が出る。そこは乗降客が幾らだなんて、そんなケチな話じゃなくていいから、滑走路とスポットだけつくればいい。

E氏 それは避難港的なものですか。

今野 そうです。ネットワークを維持するための。ところが、そういう議論が全く出ないんですよ。本来、そういうのこそが国土計画なのです。現実問題として、いままで、油がなくなりましたといって緊急着陸で助けとなって千歳空港に着陸したケースが、多い年では年間6件位もあります。

E氏 いまでもということですか。

今野 ええ。航路に合わせて、ちゃんと3,500メートルの滑走路を線上に整備していくという意味では、例えば仙台空港もそういう機能を一部果たせるかもしれませんね。300キロ短くなったら本当に助かりますし、特に成田や羽田はいまでも、上空でいっぱい下りられないでホールディングしていますから。そういうことまで考えると、仙台、千歳と根室とか、八戸、三沢もそうかもしれません。そういう機能を果たせるところを強化していく政策こそが理想でしょうね。

西のほうは、距離が短いですから逃げ場はいっぱいあるんです。ところが、東のほうは、千島列島もアリューシャン列島も大型機が離発着できる空港はゼロです。そういう検討をするのが国土計画局の仕事です。国土交通省の仕事なんです。

A氏 難しいのは、防衛政策を国土計画に入れると、「仮想敵国はどこか」という議論が出てくる。

今野 仮想敵国は北朝鮮。

A氏 そうなっちゃうんですね。それを明らかにしないことには。

E氏 でも、暗黙裡にそれは排除しているんです。いまの国土計画では扱わない、という扱いになっているわけです。

A氏 明治時代の仮想敵国はロシアだったでしょう。仮想敵国はここだと明言しないと、具体的な地べたが出てこないんですね。

今野 防衛問題、軍事問題というのはそういう問題があるから、それを国

土計画で受けるか、防衛計画で受けるかというのは別ですけど、見方としては、中央政府が責任を果たさなければならない領域からの国土計画、配置計画ですよ。ミサイル・ナイキの話をするとう議論百発して誤解を受ける。例えばいまの航空路の話をするれば、一番よくわかると思うんですよ。

それから南に向かう航空路、これは交通需要量がものすごく小さいからだけど、日本列島の一番南でそういうのがあったらいいと思うのは、硫黄島ですね。硫黄島に3,500メートルの滑走路があれば、オセアニア航路は1,500キロも先のところですから、機能すると思うんです。西のほうは、沖縄へ行くより仁川のほうが近いわけですから、逃げ場はいくらもある。しかも、長い日本列島の中で、3,000メートルの滑走路は福岡にもあるし、熊本にもあるという形で助けられますね。

安心・安全と言うのだったら、そういう発想の国土計画。つまり、かつての国総法を見ればわかるように、やるべき仕事は「規模」と「配置」なんです。配置計画論というのはそういうことではないですか。

A氏 中国地方だと、今度の国土形成計画で山陰自動車道をどういうふうにしてくれるんですか、という話のほうが強いですよ。

E氏 やはり地方へ行けば具体のプロジェクトですよ。道路ですね。

A氏 地方のプロジェクトは、地域再生計画みたいなほうに認定してもらえばいいけれども、国がやるものについてどうなんですか、具体的に言うと、山陰自動車道をどうするかということになりますね。

B氏 それは、国として極めて重要なネットワークの話だと思えますね。

A氏 重要だとおっしゃっていただくかどうか、ということから議論しなければいけない。

E氏 そこは、四全総で既に1万4,000キロというのは言っているわけです。まあ、これはインサイドストーリーで、僕は本当に門外漢だから変なことを言っているかもしれないけれども、1万4,000キロというのは五全総にも書いてあるのですが、いまの計画で書けるかどうかだけで時間がかかってしまっているわけです。本来、国土計画のあるべき論で、かつ、これまでの方針を堅持することを明言するだけなんですけれども、例の道路公団民営化議論の中で……。

A氏 具体的にどの路線というところまで入れられないのですか。

E氏 でも、1万4,000については全部路線が決まっていますから。その山陰がどこの部分かというのは明確にわかりませんが、その部分については、例の1192だか何だかの中に入っていなくても、1万4,000キロをやると書けば、ゆくゆくはグランドデザインに書いてある道路はやりますということを、宣言することになる。

A氏 いまからやらないとなったら、地方は大混乱しますから。ただ、具体的に言うと、国土形成計画のこれから5年後までに山陰道をやめるのですか、どうですかという話。順番です。

E氏 その部分のものについてはブロック計画で議論しましょうという話です。だから、地方計画ですね。

今野 いまの道路ネットワーク論で欠けているのは何かというと、道路ネットワークとしては、第二次全国総合開発計画の中では国土縦貫自動車道7,700キロ、そこから出発したわけです。7,700キロのときは、全国の主要都市のうち、20万以上だったか15万以上だったかの各都市を結ぶのを基本にして絵を描いて、それがだんだん下がってきて、いまは5万ですか。

E氏 いや、1万4,000キロも基本的にはもうちょっと大きいです。30万都市に何分以内というのが入ります。ですから、それらを単純に結ぶのではなくて、30分以内、2時間以内に行ける地域を全国の9割ぐらいカバーするとか、たしかそういう……。

今野 そこを議論する、そこを意思決定するのが国土政策なんです。

E氏 その部分はまだ四全総のときに議論ができて、1万4,000キロと宣言をしたわけですよ。例の道路公団云々の一連の議論の中で、そんなのは多過ぎるとか、9,600で十分だとかいうときに、何も言わなかったじゃないかと怒られてきたわけです。

ただ、五全総の「21世紀のグランドデザイン」でも1万4,000キロだけはちゃんと書いてありますが、今度の計画でどうなるかというのは、すごいもめているらしいです。

今野 1万4,000キロという絶対的な数値と、どのくらいカネがかかってできるのかとか、できないのかとか、そんな議論だけが残ってしまうわけです。その議論というのは、国土政策を無視した形の議論だと思います。

僕が一番腹立ったのは、石原さんが建設大臣のときに、防衛上、高速道路は国土の中でちゃんと整備すべきではないかという質問を受けましたら、「戦争になったら一番最初に敵にやられるのは高速道路ですから、そんなこと考えられません」なんて答弁しているんです。一体何を政策議論しているのかと、個人的にはものすごく腹が立ったけど。そういう理念こそが政策の基本になくてはいけないわけです。

中国の鉄道政策だってそうですよ。今度、ラサ（拉薩）まで鉄道を敷いたのだって、最低限、省都を全部鉄道ネットワークでカバーするところから始まったわけです。

B氏 今回、道路は基本的に道路族に丸投げのような形になっていますね。先ほど言われたように、30分、2時間とか、計画論みたいな話が全くない。

E氏 四全総のときに、もう計画論が終わっているということなのでしょう。

B氏 たぶん、道路一般財源の話とかいろいろなものが絡んできますから、財源が幾らになるかわからなければ、どれだけつくれるかもわからない。一般財源化みたいなことをやって、着地できるかどうかわからなかったですけども。

E氏 国土形成計画はどんどん後ろに延びるんじゃないですか。それを決められないときに出しても意味がない、というところがあって。

今野 いままでのそういういきさつをひとまとめにすると、日本社会のトップが決断すべき政策と、事業省庁の事業の実施がすべて、ごっちゃになっている。そこが政策をねじ曲げる基本なんです。そこをごっちゃにしてはダメなんです。議論というのは、政策と施策をきっちり分けて、そこから始めなくてはダメです。意思決定と事業実施とがごっちゃになって区別がつかないでいるなんてことは、政策実施機関の政府としての墮落以外の何ものでもないです。

B氏 政府のどこで議論するかというのもありますね。高速道路のネットワークなんて単なるインフラではないわけです。地域経済、国民経済に及ぼす影響というのはすごいわけですから、いや、それは内閣府じゃないかとか、官邸で直接やるべきじゃないかとか、そもそも国土交通省というところでやっているところが結構つらいですよ。

E氏 本来横串でやるような話の総理府をつぶす、というのが省庁再編だ

ったわけですよ。各縦割り官庁が横串をやるということで国土交通省でやることになったのですが、結局、省庁再編してからあとは、内閣府がどんどん肥大化していて、もとに戻っているんです。象徴的なのは、国幹審（国土開発幹線自動車道建設審議会）なんて、昔は総理直属だったのが、いま、国土交通省になったことはなったけれども、決められないんですね。

今野 学会やシンポジウムとかいうと、元気なときはしょっちゅう出ていたけれども、そこでも日本人の社会というのは常に基本的に間違っているのは、議論として最初にやるべき議論と末端でやるべき議論が常に混同されている。その中で反対か賛成かだけの話になっているわけです。そこは基本的に間違っていると思います。

A氏 では、今日はここまでにします。（了）